

丸井グループ社史

丸井グループ

1

時の真相に迫る



集団就職 出発時の見送り（青森）

## “金の卵” 獲得に奔走

トップセールスで求人

高度成長の波に乗り、石川県では昭和34年ごろから織物業者の織機保有数が飛躍的に増加した。人手不足が深刻化し、織物会社の多くは、東北地方へ“金の卵”と呼ばれた中学校卒業生の求人に出かけた。

宮米織物では、経営陣が青森県の漁村に毎年のように出向いた。予め職業安定所から中学校の教師を通じて、親に打診しておいてもらうものの、色よい返事はなかなかもらえない。子供が安心して働ける会社であることを理解してもらうため、意を尽くして親に説明し、実家に洗濯機を贈ったり温泉に招待したりもした。

桜の季節になると、鳥屋町にある良川の駅は集団就職の金の卵を乗せた列車が着き、活気にあふれた。歓迎のプラスバンドが鳴り響く中、青森まで迎えにいった幹部社員は、おさげ髪もかわいい

女の子を連れて降り立ち、会社に向かった。

慣れない生活が始まることへの緊張をほぐすため、新入社員には入社後しばらくは仕事をさせず、天気の良い日にハイキングに連れて行くなどした。また、仲間同士、気が合うように、寮の部屋割りを定期的に組み替えるなどの気配りも欠けなかった。

一方、創業して日の浅い丸井織物は、宮米織物のような知名度がないため、奥能登を中心に知人のツテを頼って人材獲得に回った。そして、盆と正月の度に、奥能登の実家まで車で送り迎えをしたのだった。

39年には、七尾城北高校の鹿西分校として、四年制の定時制高校が創立された。働きながら勉強のできる環境が整ったことで、金の卵たちの織物会社への定着率も一段と高まった。